

橋爪大三郎

東京工業大学教授

日本の言論の状況をひと言でのべるなら、「ことば欠乏症」である。

おしゃべりに類する雑多な言説は、むしろ溢れている。だが公共の場で、人びとの合意をうみだせる、たくましく、活き活きとした、美しい日本語（言論のいわば「血液」）が欠乏している。悪性貧血でふらふらなのが、日本の言論だ。

かつて、よちよち歩きの戦後民主主義は、そのうちまともにことばを使いこなして、自分たちで制度や政策を決められると信じられていた。ところがことばは、いよいよ貧弱になっていくばかりだ。これはどうしたわけなのか？

古典を、日本人はますます読まなくなっている。「活字離れ」ではない。文字の量は増えているのだが、情報として読み捨てられるだけで、自分の価値や哲学を深め、人間としての基盤を掘り下げる糧

次の総理はこの人

「次の総理」アンケート得票結果

1位	安倍 晋三	自民党幹事長代理	18票
2位	小沢 一郎	民主党副代表	4.5票
3位	加藤 紘一	元自民党幹事長	3.25票
4位	谷垣 禎一	財務大臣	3票
5位	福田 康夫	前官房長官	2.58票
6位	石原 慎太郎	東京都知事	2.5票
7位	岡田 克也	民主党代表	2.25票
8位	平沼 赳夫	前経済産業大臣	2.16票
9位	亀井 静香	元自民党政調会長	2票
10位	野田 聖子	元郵政大臣	1.5票
10位	町村 信孝	外務大臣	1.5票

麻生 太郎	1.33票	佐藤 栄佐久	1票	与 謝 野 馨	1票
高村 正彦	1.33票	岡田 博之	1票	片山 善博	0.5票
菅 直 人	1.25票	竹中 平蔵	1票	北川 正泰	0.5票
神崎 武法	1票	田中 康夫	1票	増田 寛也	0.5票
小池百合子	1票	西村 眞悟	1票	亀井 善之	0.33票
小宮山洋子	1票	船田 元	1票		
櫻井よしこ	1票	舩 添 要一	1票		

*複数の人物を推した場合は按分した。

「ポスト小泉」大アンケート
各界著名人64人が推す

次の総理はこの人

日本の「明日」を託すべき人物、その条件とは



知力と哲学

はしづめだいさぶろう
橋爪大三郎

(東京工業大学教授)

田中康夫 田中康夫氏は、党内政治と無関係なぶん、有権者のほうを向いている。政治姿勢がはっきりしているし、無駄な公共事業にストップをかける指導性もある。時代を読み抜く知力と哲学がある。スタッフの声に耳を傾ける柔軟性もある。指導者に必要な資質だが、いまの政治家には欠けている。田中氏自身がどこまで首相に向いているかわからないが、こういうタイプの政治家がもっと出てきてもらいたい。

になっていないのだ。

ある学生「塾で教えている高校生が、赤十字をアカジウウジと読んだので驚いた」別の学生「この大学にもアカジウウジはいっぱいいるよ」書きことばと無関係に日本語を覚えていく証拠だ。

私が小学生のころ、テレビはなく、暇にまかせて本を読んだ。ルビがあるから、大人の本だろうと勝手に読んだ。テレビはあとから入ってきた。

いまの子は、文字を習うより先にテレビがある。学校で字を習っても、話しことばをこう書くのかという感激がない。テレビを視ているあいだ、話しても無意味である。話しことばでも書きことばでもない、無責任で不自然な傍観者の言語体験がテレビである。

人びとの合意形成に役立つことばは、書きことば（練りに練った思索や哲学）

を基礎にしたわかりやすい話しことばである。なるべく多くの人びとに、きっちり思想と行動の枠組みを届ける。

テレビから始まる言語体験は、不幸だ。「アカジウウジ」が一度も、書きことばや他者によって検証されない。子どもじみた思い込みや情念が、チェックされずに公共の場に持ち込まれる。それを煽る「コント」もブームになっている。

「ことば欠乏症」には、社会的背景と必然がある。それに立ち向かうには、学校でことばを教えるやり方を変えることだ。学校は、テレビと逆の原理（書きことばにもとづいて話しことばを使いこなす）の場のはずである。テレビ以後のメディア文化を踏まえ、ことばの尊厳、ことばを使う人間の尊厳を取り戻すための方法論をみつめることが、この国の言論を復活させる第一歩であろう。

「賞味期限」は完全に切れた 徹底的に国会討論すべき

社会学者 橋爪大三郎さん(56)

日本人はよく、「憲法に書いてないからできない」と言いますね。9条をめぐる問題はまさに典型ですが、それは憲法とは何かがわかってない。憲法とは、国民が国家

を組織する意志や決意を書き留めたものです。やりたいが、書き忘れたことがあつたなら、書き加えたり書き直したりすればいい。国民が憲法をコントロールし、



はしづめ・だいさぶろう
東京工業大学大学院社会理工学
研究科価値システム専攻教授
教育や政治、歴史などの
分野で幅広く発言。「言
語／性／権力」「その先
の日本国へ」など著書
多数

憲法が政府をコントロールする。「最高法規」というのは、国民が憲法のもとに置かれるという意味ではなく、政府は憲法に逆らえないと言っているだけ。憲法は、政府が無視してはならないことを書いてある権利のリストであり、国民が政府を動かすツールです。憲法は人間がつくるものだから、当然、完全ではありえない。だからこそ改正案項がある。世界と社

会がこれだけ変化してるのに憲法を修正しないのは、民主主義維持のための「不断の努力」を怠ってきたことになるのではないか。日本国憲法には賞味期限があったと思う。外国の武力をあてにして平和を実現するという虫のいい内容で、混乱時にどうすべきかの方法論もない。相当な弱小国であるとか、戦後処理期間であること

を前提とした10〜15年の時限立法。戦後処理を進めるために賞味期限の延長を重ねてきたけれど、湾岸戦争でほんとに切れ、9・11でも「切れ」状態です。中国や韓国など周辺諸国の民衆が改正に大騒ぎして、その報道を見た日本国民の半分くらいが改正憲法は「よくないのかな」と思えば、もう憲法としては役に立たない。

そうならないためにも、自民党と民主党の合意のうえで、表舞台でインドレスの国会討論をやるべきです。土日もやり、300人でも500人でも参考人を呼べばいい。テレビ中継がお金がかかるのなら、ネットで中継すればいい。そこまで議論が尽くされていれば、他国も何も言えない。長丁場の議論をすれば、へこた

れて馬脚を現す政治家がどんどん出てきて、最後には、優秀な政治家と本質的な議論だけが残る。そうしたプロセスに二年はかけてほしい。大事なのは、衆院解散でチャラにならないよう、必ず総選挙とは切り離すこと。国民が「党利党略で妥協したな」と思ったら、憲法改正は必ず失敗します。

受験生の皆さんへ

志望理由を固めるにあたってのメッセージ

志望理由をまとめるときに意識しておいてほしいことを東京工業大学の橋爪先生が語ってくれた。すべての学部系統に共通することだから参考にしよう。

大学とは学問を突き詰めるところ

大学は、高校までで教えられたことを入り口にして、学問を突き詰めて考える場です。「原理から考えるとこうなるだろう」というところまでとどまってしまう。これでは「本物の勉強」をしていないと言えませんか。「理論的にはこうなる。今ここで実験をしてみるとこのようになるはずだ。ただ、その際の条件は2つある」などと実際に行うにあたって発生する様々な条件を考

えて語ることができて、初めて「本物の勉強」をしているといえます。大学では、ここまで学問を突き詰めていきます。高校生の時からテストのための勉強や受け身の姿勢ではなく、真剣に学ぶこと、それが土台になります。

「将来どんな仕事をしたいか」を自分で決める勇気を持つ

大学で学部を選ぶときに考えておいてほしいのは、将来どんな仕事をしたいかということ。大学は、卒業後に企業や研究機関の一員として、あるいは弁護士などの資格を持った職業人として「働く」ことを前提に学ぶ場だととらえてほしいです。めざす仕事が決まらないという人

も、とりあえず一つの目標を決めて、とことん努力してみること。大きな選択ですから悩んで当然ですが、周囲に流されず、また、決断を先延ばしにせず、自分で決める勇気を持つてください。

志望理由を考えたら、形に残しておく

入試本番できみらしさをアピールするためにも、考えた志望理由はきちんと形に残しておこう。今月の添削課題は「大学で学ぶことの意義」、「科学技術と日本社会」の2本。どちらもきみの考えたことをきみ自身の言葉で形に残しておくことができる。ぜひ取り組もう。



東京工業大学大学院社会理工学
研究科価値システム専攻教授
橋爪大三郎先生



す仕事が決まらないという人



さまざまな視点

2005 - 2 - ⑤



橋爪 大三郎

[プロフィール]

1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。執筆活動を経て、現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科・価値システム専攻教授。社会学者。東京財団・評議員、日本コーポレートガバナンスフォーラム理事、日本構想学会理事。著書：『幸福のつくり方（ポット出版：2000）』『世界がわかる宗教社会学入門（筑摩書房：2001）』『人間にとって法とは何か』『アメリカの行動原理』（PHP新書）ほか。

世界の宗教と日本人

橋爪先生には2005年までJICA広尾訓練所の青年海外協力隊候補生向けに“宗教社会学”をテーマにご講義を頂いておりました。先生の講義は候補生にも大変好評でしたが、今回は世界における宗教の意味や日本人の宗教観、それにまつわる諸問題について改めてお話を伺いたいと思います。

宗教の発生

日本人はふだん、「宗教」のことをあまり意識もせずに生活しています。まず最初に、宗教がいつごろ、どのようにして出来たのかということから考えていきましょう。

いまある宗教の大部分は、古代に生まれました。古代とは、農業が始まった時代です。いろいろな民族が適作地を求めて、大きな河川の周辺に移住し、国家をつくるようになります。そうしてみなが平和に暮らせればよいのですが、どうしても国家と国家、民族と民族の間で紛争が起きる。すると、戦争になりますが、それとは別に、仲間の結束力を高めるために「自分たちが正しい」と思える仕組みを作りました。これがいわゆる「民族的な宗教」の始まりです。これが後に、理想の人類共同体をめざそうといったメッセージ性の強い「普遍宗教」に変化していきます。それが今日、われわれの大きな遺産となっている大宗教（仏教、キリスト教、イスラム教）です。中世や近代も、古代にうまれたこうした宗教がベースとなって築かれたのです。

日本における宗教

では日本と言うと、大きな河がなかったせいもあって、ほかの民族と接触して文明を築く、本格的な古代を経験しなかった。そのまま日本人は、歴史を歩みはじめました。こうなると、大宗教の必要性がうすい。渡来した仏教も、本来、日本に土着の神道とはまったく異質であるにもかかわらず、同一視されるようになる始末です。大宗教は、民族紛争と関係があり、それを克服するために生まれたものなのですが、その意識が非常に希薄なんですね。そうすると宗教の

重要性について、まず想像力が働かない。そういう意識のまま海外に行ってしまうと、周囲の人たちとの人間関係がきずけないという問題が起きます。観光客なら、それでもまだいいかもしれない。でも、任地に長期間滞在して協力活動を行なう任務がある協力隊の方々には、宗教というものの意味合いを深く理解していただきたいと思います。

日本人の宗教音痴が引き起こす問題点

世界では、異質な相手との向き合う場合、まずお互いの宗教を確認しながら関係を築いていくわけですが、日本人の場合、そんなことより相手の人柄や気持ちを理解するほうが大事で、親しくなってからやっと相手の宗教を知る、という順番なんです。同質な人々とばかりつきあってきたので、これが自然かもしれませんが、この方法だと、世界の人々と仲よくすることができないし、自分にも相手にもプラスになるように知恵をめぐらすこともできない。宗教とは要するに、異なった人々が一緒に暮らしていくための知恵なんです。その知恵に疎いのが、日本人の宗教音痴のいちばんまずい点で、私が問題だと思っているところです。

日本人でも宗教を信じている人は、当然たくさんいますが、現実には宗教よりもっと大事な帰属集団、日本というものがあって、そちらのほうが優先されてしまうんです。宗教のことは後回しにしておくのが、日本で、良好な人間関係、社会関係をきずく場合の基本なんですね。異質な相手ときちんと向き合える能力さえ具わってれば、宗教に関して無知だって、別に構わないんです。でも世界中の人々は、宗教を手がかりにその能力を高めてきたわけだから、日本人も宗教について勉強して、その能力を高めていくというのが一番簡単なやり方ではないだろうか。

宗教理解＝異民族理解

世界では、人間が互いに違っているのが当たり前ですから、違いを理解し尊重するところから人間関係が始まります。

宗教は、大変便利なもので、コンピュータでいうと「基本ソフト」のような存在です。相手が、そのプログラムで動いている。すると、相手の考え方や行動が予測できる。何か問題が起きたときに、相手の宗教を知っていれば、「なぜ相手がそう考えたのか」という理由を探ることが出来る。捕鯨問題を例にとっても、なぜあんなに反発が起きるかという、西欧文明では家畜と野生動物は、同じ動物でも、全然違うカテゴリーなんですね。家畜は、煮て食おうと焼いて食おうと勝手に、それは人間が食べるためにある。でも、鯨を含めた野生動物は、人間よりも先に創られているから、固有の権利（みたいなもの）を持っている。このように、宗教を勉強することで、結果的に民族間の摩擦や誤解が少しでも解消されるなら、それは意味があることなんです。

異なる宗教の人々が、同じように考え行動することは、理想かもしれないけれど現実には難しい。だからこそ異質な人々と共存し、互いを信頼できる仲間にしなくてはいけない。異なるからこそ、相手を大事にしなければならない。相手には相手なりの考え方や感覚がある。それを理解していくことが、双方の信頼に結びつき、共存へと発展していくわけです。そこまできかないと、世界の根本的問題は解決しないんです。

われわれ日本人は、世界的に見れば少数民族民族です。セキュリティのためにも、人類の大きな集団、つまり、主要な大宗教については、十分研究して、彼らの行動を理解し予測しておくことが大事ですね。このことは、広い意味で、政治やビジネスなどにも応用が出来ると思います。

宗教は理屈ではない

どのような人々にも自分たちなりの考え方・習慣があります。そしてふつう、それ以外の考えをする人々、それ以外のことを信じている人々の存在を想像することができません。でもそれがはっきり認識できるのが、他の民族なのです。異質なものが入り込んできたときに、はじめて他者との違いが分かる。そうすると、ひるがえって、自分たちが何を信じているかについても自覚的になれる。神の存在は、それを信じている人々にとっては当たり前ですが、信じていない人々にとっては、何の証拠もない。ここが宗教の不思議なところで、理屈を超えているんです。神の存在や宗教の教義については、いくら証拠を積み重ねて頭で考えても、解決がつかないんです。そのことが正しいか間違っているかではなく、信じるかどうか。つまり、選択の問題になる。「宗教は理屈じゃない」-これが宗教の本質であり、そう考えることが、宗

さまざまな視点

教へのリスペクトでもあります。

協力隊員の可能性

皆さんの協力隊経験は、とても貴重なものだと思いますが、帰国後そのまま日本に同化してしまったら、この貴重な経験を活かすことはできません。協力隊員として、任国を見てきたように、これからは故国である日本に対しても、外の視点を取り入れることが重要です。そうすることで、日本社会の抱える課題や問題点を発見し、それぞれの分野に役立てていく。これができてはじめて、協力活動に行った意味が出てくると思います。故国に戻ってきたという意識でいるのではなく、故国をもうひとつの任地だと考えればよいのではないのでしょうか。感受性の豊かな若い時期の経験を、今後も活かせるよう、更なる努力を重ねられること、そして、今後の活躍を期待しています。

■橋爪大三郎先生の出演したテレビ番組『知らないでは済まない宗教の講座』が、東京財団のサイトで、動画のかたちで公開されています。イスラム教、キリスト教、仏教など、全10回。『世界がわかる宗教社会学入門』を参考書に、ごらん下さい。
情報交流事業 国をつくる、国を超える
<http://www.tkfd.or.jp/division/public/nation/ibunka.shtml>

特集 ● 戦争責任、60年目の決着

論客17人の主張

——迷路の出口を探る

実質は中国、韓国国内問題

橋爪大三郎／東京工業大学大学院教授

日本の戦後処理は、正常なたちで完了した。政府がポツダム宣言を受諾し、陸海軍の武装解除と復員も滞りなく進み、保障占領もスムーズで、戦後改革も歓迎され、戦勝国とのあいだで講和条約が締結され、独立を果たした。東南アジア諸国へも賠償している。

客観的にみて、これほどうまくいった戦後処理は多くないだろう。アメリカをはじめ、戦勝国との関係も良好である。歴史問題を蒸し返している韓国、中国は、講和条約に戦勝国として席を連ねなかった国々であることに、注意すべきだろう。韓国は、日本の一部だったので、日本と戦争できるはずもない。中国は、抗日戦争を戦ったが、当時はゲリラで、国家となつたのは一九四九年だ。このいまましい思いが、両国のナショナリズムの底流にある。

歴史問題とは要するに、中国、韓国の国内問題だ。わが国はどんと構えていればよい。そして、多様な質の高い歴史教科書を多くつくり出すことだ。



おほけ
「出版ニ入」
2005.12月号

「書評のせい」と
橋爪大三郎著『はじめての構造主義』はじめての構造主義』によって、構造主義の手ほどきを受けた読者も少なくないのではなか。明快・論理的な思考で知られる社会学者・橋爪大三郎氏のこれまでの書評の集成が『書評のせい』と』（A5判・382頁・2500円＋税）として刊行されている。

読む、時代を読む、生活を文化を読み、解説・論文とブックガイド、インタビュー、直であること。著者がどんなに著名で、権威があろうと（あるいは、なかろうと）知り合いだらうと、誰だろうと、今度書かれた本は改めて感心させられ本から言えること（だけ）をばつぎのくる。こうし美著、池田清彦『分類と決定法入門』、隈研吾



著者は1980年代、二エアカ・ゲームの渦中に登場以来、国内外の動向、思潮を客観的に見えた著者と発言で論壇をリードしてきた。その著者のこの20年（83年～03年）の書評は、たいてい、本の著者、興味深い。『書評のせい』は著者の『書評論』として「書評を書くということ」を読んで楽しくないだらう。褒めるのがむずかしい本の書評は原則としてひき受けない。書評は書き慣れつまり、自分も書評される側の人間だ。／本の著者だが、そうやって順番に、読者となり評者となつて、互いの本について意見をのべあい、共同で評価を確立していく。その一ひつとやりとりが、書評なのだ。／当然、そこには、ル

「新・建築入門」なども守らへ。さらに書評は必ず褒めることにしている。さもないと読んで楽しくないだらう。褒めるのがむずかしい本の書評は原則としてひき受けない。書評は書き慣れつまり、自分も書評される側の人間だ。／本の著者だが、そうやって順番に、読者となり評者となつて、互いの本について意見をのべあい、共同で評価を確立していく。その一ひつとやりとりが、書評なのだ。／当然、そこには、ル

海鳥社＝〒810-0074 福岡市中央区大手門3-6-13 電話092-771-0132

日本の宣伝力をどう強化すべきか

東京工業大学教授
橋爪大三郎

日本人も、日本の政府も、外国にものごとを説明するのが下手くそだった。

理由は、いくつもある。

第一に、日本人のコミュニケーションのあり方の問題。日本人のコミュニケーションは、ハイコンテクスト（文脈の負荷が高い）で、共通理解を推測して埋め合わせなければならない部分が多い。主語が省略されるのは、その一例だ。暗黙のコンテクスト（共通了解）をうまく参照するのが、コミュニケーションのコツということになっている。それがあてにできない外国の場合、まず様子をみようとする。すると、何も主張することがないのだと解釈されてしまう。

第二に、日本と異なる、ローコンテクストのコミュニケーションがどういうものか、よくわかっていないこと。そういうコミュニケーションをどう組み立てたらいのかの、戦略もない。言いたいことはみな、メッセージのなかに込めなければならない。演説でも、交渉でも、原則や主張点を明確なフレーズに表現しなければならない。これができていない日本語の文章は、そもそも英語に翻訳することができない。外国の人びとに何かを伝えようとする場合、コミュニケーションのモードを、ハイコンテクストからローコンテクストに切り換える必要がある。

共産党の宣伝と、言論の自由

さて、宣伝とはどういうものか。

共産党には宣伝部というものがあって、宣伝の全般をとり仕切っている。

マルクス主義では、階級闘争がこの社会の根底にあり、それが人びとの意識に反映すると考える。だが、人びと全員が正しい意識をもつとは限らない。ある時代の意識は「支配階級の意識」だからだ。そこで革命を進める共産党は、労働者たちがブルジョ

ワ的な意識を捨てて、プロレタリア階級の意識をもつように指導する。その手段が宣伝だ。この宣伝は、共産党が政権をとったあとも、反革命が起こるといけないので、ずっと維持される。

中国共産党にも宣伝部があって、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、出版などマスメディアを担当している。もともとこうしたメディアは国営で、共産党の支部が置かれ、宣伝部の傘下にあった。ニュースや論説はいちいちチェックを受けるし、党主導のキャンペーンも進めなければならなかった。いまでも基本は変わらない。

こうした国では、言論の自由がない。メディアは一枚岩だ。さまざまな考えの国民がいても、メディアを通じては知りようがない。党や国家の方針にそったキャンペーンは強力で、西側のメディアがつけこむすぎがない。

いっぽう、日本など西側諸国で、宣伝と言えば、商品広告をまずイメージする。商品広告は無料で、ばらばら（各企業が勝手にやるから分権的）に、商品についての情報を提供する。マスメディアは広告（つまり企業の支払い）によって維持されている。政府は、言論の自由を守る義務があるので、原則として宣伝はやらない。例外はナチスドイツで、宣伝相ゲッベルスが徹底した宣伝戦を繰り広げた。

第三国の判定が重要

言論の自由がある国と、ない国が、たとえば歴史問題などをめぐって、宣伝合戦を繰り広げたらどうなるか。見たところ、ない国のほうが優勢になるだろう。言論の自由がある国は、国内にいろいろな意見があるので、ない国は片方を応援したり、ひっかき回したりできる。いっぽう、言論の自由がない国は、マスコミも世論も統一されていて、ある国から働きかける余地がない。

では、世論は、言論の自由がない国のほうが強力である国のほうが弱体なのか。

そうではないと思う。



はしづめ だいさぶろう

1948年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。社会学者。現在、東京工業大学教授。東京財団評議員。著書に、『世界がわかる宗教社会学入門』（筑摩書房）、『はじめての構造主義』（講談社現代新書）、『隣りのチャイナ』（夏目書房）、『アメリカの行動原理』（PHP新書）など。

さまざまな考えがある。それらを無視して成り立っている世論は、論争で鍛えられていない。そのことを衝かれれば、そうした国の議論はもろい。いっぽう、言論の自由がある国は、これ以上議論が崩れることはない。もしもそうした国の世論がコンセンサスに至れば、とても強力だ。

さて、こうした両国の論争は、ほかの国（たとえばアメリカ）からどう見えるか。言論の自由がない国の議論は一方的で、ある国のほうがまともだと見えるはずだ。言論の自由がない国は、これを知っている。アメリカの世論を動かそうとする。たとえば、どしどし英語で情報提供するなど。アメリカの見方が結局、論争の流れを決める。相手国との論争にばかり気をとられていないで、アメリカの世論を味方につけることを考えないか。

国際社会の論争では、当事国同士の応酬もさることながら、第三国にどう訴えて、味方につけるかが大事になる。こういうことを、ちっとも考えていなかったのが、日本ではないだろうか。

自国のイメージに責任をもつ

政府は、国民（主権者）を代表し、国際社会に向けて明確なメッセージを発しなければならぬ。

言論の自由がある限り、国内にはさまざまな見方がある。それでも、いやだからこそ、政府はあえてある明確なメッセージをつくり出すべきである。政府は、自国が国際社会のなかでどのようなイメージで見られるかの、責任をもたなければならない。

これを、「宣伝」のまっとうなあり方と関連づけて、のべてみるとどうなるか。

宣伝は、実物に先立って流布される。鰻屋の店先の、蒲焼のにおいのようなもの。宣伝は、背後に実物が控えている限りで、真実だと見込まれている。けれども、宣伝は、実物と切り離されて、それ自体が消費されるようになる。エレガントな宣伝は、そういう宣伝をするその国も、エレガントなのだろうというイメージをうみだす。宣伝は、実物より広くいき渡る。イメージはひとり歩きしやすい。

他国と論争する政府が、どのようにそれを第三国に向けて説明するか。どういう原則とポリシーにもとづいて、行動しているか。自己主張するか。これが明快で、共感しやすいものなら、信頼できる国だ。というイメージを獲得できる。これが不明瞭で、一貫性のないものなら、共感はいられない。イメージは貴重な資産だ。国益を実現するのに必要な、他国の行動をひき出すことができるからだ。

自国のイメージをつねに意識し、自覚し、よりよいものにするのは、政府の重要な役割だ。

自国の人びと（科学者だろうと、ビジネスマンだろうと、芸術家だろうと、スポーツマンだろうと）のすぐれた活動を、いろいろな機会にアピールすること。国民と政府の関係が明確で、政府が国民のために行動しているという原則がはっきりしているならば、こういうアピールは説得力をもつ。

政府は、他国がしかけてくるネガティブ・キャンペーンにも、対抗しなければならぬ。日本の政府はそもそも、ネガティブ・キャンペーンが仕かけられ（う）るという感覚がないのではないか。その感覚をもち、対抗策を用意し、国民のために、自国のイメージと誇りを守る。しかもそれを、エレガントに行なう。こういう仕事のために、税金の一部をぜひ有効に使うべきであると思う。

熱い時代をやり過ごした作家



社会学者・東京工業大学教授

橋爪大三郎

村上春樹さんは同学年だそうですが、なんとなく私より年下なのかと思っていました。学生運動の波が退いたあと、ちょっと遅れてやってきて、なにか始めた。そんな作家という感じがしていったんです。橋本治さんなら、文学部の授業で一緒になったし、全共闘世代だとよくわかっていました。

ある時期に大勢で共通体験をもつと、あとでそれを原点に、ものを考えるようになるものなんです。私の世代はその傾向が強い。でも、それを「やり過ぎた」村上春樹さんは、ちよつと違う。作品を読んでも、時間軸や空間軸のどこが原点になっているのか、わからない。このことが、彼の世界の魅力となっているように思えます。

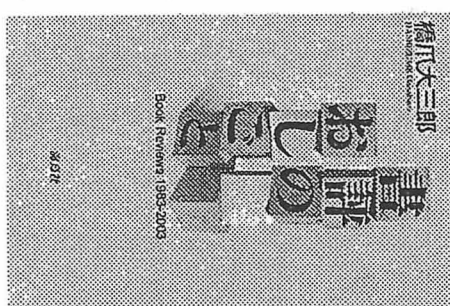
村上さんは、長編を書くという志向が強いんですね。長編は、茫漠としたつかみどころのない場所で、自分の感性をジャ

イロにして物語を紡ぎ出していく、困難な作業です。それはちょうど、私たちが自分のだらだらした生き方に起承転結をつけようとがくとき、直面する、困難や無力感とつながっていると思う。感性をもとにそんな長編をぐいぐい書いてしまえること自体に、いま世界中の多くの人が、魅力を感じているのではないか。

『ねじまき鳥クロニクル』もそうですが、夢と現実が相互浸透して区別できないような世界がしばしば描かれる。これは、決定的な何かをやり過ぎ、軸をもたない作者の浮遊感をなぞるところで失調し、方向感覚をなくして漂流している、私たちの比喩にもなっている。村上さんの作品を読むと、私たちはそんな感覚を呼びさまされ、荒唐無稽な物語のほずなのに、鮮明なリアリティに映るのです。

書評のおしごと

橋爪大三郎／著、海鳥社／刊



本書は社会学者にして当代の論客が、20年間にわたって書いた書評の集成。新聞・雑誌に発表されたものを中心に、ネット上の鼎談や解説・論文なども含めて、登場する書名は優に200を超え、専門分野の関連書ばかりかと思いきや、折々のベストセラーや話題書から、「なんでこれを？」という本まで含まれ、目次に並ぶ著者名・書名を見ても、書評家としての著者の懐の深さが伺える。

あとがきに曰く「書評は必ず褒めることにしている」。だから褒めるのが難しい本は原則断る、しかし褒めることと、公正、公平、正確、率直であることは、必ずしも矛盾しない、と著者はいう。そこには微妙なバランスがあり、神経の使いどころとも。この一文を読んでから一つ一つの書評を追うと、そのツボが何となく分かる。絶妙なバランス感覚と、苦手分野であれ意見を異にする相手であれ、誠実に温かく相対する姿勢が著者の書評の持ち味で、「書評の最良の教科書」と称される所以だろう。(2500円、ISBN4-87415-542-1)